

## 日常生活史——M氏の場合

「1930 年から 1933 年までのブラウンシュヴァイクにおける  
労働者の日常生活」（その十三）

宝 福 則 子

### はじめに

本稿は、『人文研究』第 91・97・98・99・101・103・105・107・108・113・114・119 輯に続く、「1900 年から 1933 年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第 91 輯を参照されたい。

今回利用した、当該資料は、1980 年 1 月 23 日の 15 時から 19 時まで、M 氏の自宅で行われたインタビュー内容を、A 4 タイプ用紙 72 ページに書き起こしたものである。

ここで、参考のため、まず、M 氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

|                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 1903 年 9 月 27 日 | ブラウンシュヴァイクで誕生         |
| 職業              | 工業セールスマン              |
| 1914 年～1917 年   | 自由体操協会会員              |
| 1919 年～1933 年   | 商業店員中央連盟会員，一般職員中央連盟会員 |
| 1920 年～1938 年   | ドイツ・ユースホテル連盟会員        |
| 1923 年～1925 年   | <b>Juso</b> 及び社会民主党員  |
| 1924 年～1933 年   | ドイツ・フリーメーソン協会会員       |
| 1926 以降         | 国際社会主義闘争同盟            |
| 1925 年～1933 年   | 自由フォルクスビューネ会員         |
| 1926 年～1933 年   | 労働者禁酒同盟会員             |
| 1926 年～1933 年   | フォルクス・フィルム連盟会員        |

役職：一般職員中央連盟青年部長（1923 年～1926 年），一般職員中央連盟専門別部門部長（1930 年～1933 年），一般職員中央連盟評議員（1930 年～1933 年）

結婚：1934 年に工場労働者と結婚

父：1869 年にブルックドルフで誕生，1949 年にブラウンシュヴァイクで死亡。職業は，ブラウンシュヴァイク機械製作所及びアンメ・ギーゼッケ & コーネゲン社の機械組立工，1922 年から 1934 年まで失業。ドイツ金属労働者同盟所属（1891 年～1933 年），社会民主党員（1890 年～1917 年及び 1922 年以降），独立社会民主党員（1917 年～1922 年），ドイツ・フリーメーソン協会員。

母：1869 年にビールヴィーゼで誕生し，1935 年にブラウンシュヴァイクで死亡。1899 年の結婚後は臨時雇い労働者や家内労働者。社会民主党員及びドイツ・フリーメーソン協会員。5 回の分娩。

## 1. 両親について

私の父は 1869 年 11 月 19 日に，ザーレ川 *Saale* 沿いハレ *Halle* の近郊ブルックドルフ *Bruckdorf* で生まれました。ここブラウンシュヴァイクには，1890 年頃に来たに違いありません。つまり，彼が 1891 年のドイツ金属労働者同盟 *Deutscher Metallarbeiter-Verband* の創設に係わった時には，すでにここにおいて，社会主義者鎮圧法の終わり頃の時期にはマインツ *Mainz* にいたのですから。

父の宗教はルター派の新教でしたが，彼も教会から脱退しています。1921 年に脱退したのだと思います。この時期に大きな脱退運動があったのです。私の誕生前は，父は機械組立工でした。

その後，失業し，その間，主に私の稼ぎと，それから庭で耕作した作物を売ったりしました。またその後に小さな代理店というか，つまり商品の販売

をして少し金を稼ぎました。しかし、それらはどれも生活の基盤とはなりませんでした。それで母親が大変きつい仕事をしました。例えば、住宅協同組合の家々が建て終わると、新築の家の掃除の仕上げなどをしました。そういう彼女の仕事を父は手伝いました。そういった仕事はみな臨時雇いの仕事でした。1928年までは、私の長姉にかなり良い稼ぎがあったので、彼女が家計を助けていました。姉たちや弟も、仕事に就いていました。私には一人だけ弟がいたのです。そういう風にして、何とか暮らしていたのです。しかし、彼もその後失業しました。そんな風に私の家は、上がった、下がったりの生活でした。

父は、村の国民学校に通いました。それから機械組立工の見習い修行をしたのです。ザーレ川沿いのハレで機械組立工の見習い修行をしました。彼は親方にはなりませんでした。ハレで見習い修行をし、見習いの後に旅職人の遍歴に出ました。ハンブルク *Hamburg* でしばらく働いて、マインツでも働きました。その間に何処で働いたのかは、わかりません。彼が昔語ってくれたところによると、マインツで、ある靴職人の親方の所に住み、その親方が父を社会民主主義運動に誘い入れたのです。そして1891年に、ブラウンシュヴァイクに来ました。父にはブラウンシュヴァイクに親戚がいたのです。自営の職人でしたが、父の姉がこの職人と結婚していたのです。ブラウンシュヴァイクには、父の兄も一人いて、ある工業系の会社で職人として働いていました。そういったことが、父がブラウンシュヴァイクに来た理由でしょう。父が一度、機械組立工としてこの親戚の職人の元で働いたことは知っています。機械組立工場でした。その後、ブラウンシュヴァイク機械製作所 *Braunschweiger Maschinenbau-Anstalt* ( : **BMA** ) で働きました。この会社はブラウンシュヴァイクで大きな意味を持つ企業でしたが、その後、かなり衰退してしまいました。多分、経営の方法を誤ったのでしょうが、まだ今日も存在してはいます。一度、完全に没落してしまって、その後、再建されたのです。今は、小さな規模で、ダールマン・コンツェルン *Dahlmann-Konzern* が経営しています。父は、このブラウンシュヴァイク機械製作所を解雇されていま

す。しかもほんのささいな事が原因ですが、彼が労働組合員でもあったので、それは解雇の単なる口実だったのです。子供用のスケートを作るために、ちょっとした鉄の部品を自家用に細工して、家に持って帰ったのですが、それを告げ口されて、解雇されたのです。**BMA** は、労働者が非常に強力に組織されていましたが、告げ口する者は何処にでもいます。

その後、父はアンメ、ギーゼッケ&コーネゲン社 *Firma Amme, Giesecke & Konegen* で働きました。この会社は、後に **MIAG** 社となりました。ここでも機械組立工として 1923 年まで働きました。父はアンメ社ですでに第一次世界大戦前から働いていました。第一次世界大戦の数年前からということは確実です。私が学校に入った 1909 年には、すでにアンメ、ギーゼッケ&コーネゲン社で働いていましたから、1905 年か 1906 年からかもしれません。

父は、母との結婚前に他の女性と結婚していたことはありませんし、私生児をもうけたこともありません。父自身も私生児ではありません。私の両親は、1899 年にブラウンシュヴァイクで、新教ルター派の教会で結婚しました。両親に公式な婚約期間があったかどうかは知りませんが、最初の子供は結婚式の 3 ヶ月後に生まれました。いつ頃に両親が知り合ったのかはわかりませんが、結婚前の数年間、付き合いがあったことは知っています。

私たちの家には、昔、絵はがきを貼ったアルバムがあって、家族の思い出の品として大事にしていました。つまり絵はがきを貰うと、そのアルバムに貼っていたのです。今ではノスタルジーで、同じような絵はがきが、又再び印刷されて売られていますが、色付きです。その中に父が母に送った絵葉書がありました。それらは結婚した時期よりも古いものだったのです。だから、両親はブラウンシュヴァイクで知り合ったのです。

父はドイツ金属労働者同盟の創設者の一人ですが、**SPD** の黨員でもありました。そして、**SPD** の分裂の際には **USPD** に行きました。ブラウンシュヴァイクでは、ほぼすべての黨員が、**SPD** の分裂の際に **USPD** に行ったのです。**SPD** の分裂の際には約 5000 人だった **SPD** の黨員数が、たったの 100 人しか **SPD** に残らなかったのですから。ブラウンシュヴァイクでの分裂は、私が

覚えている限り、公式には1917年でした。父は1922年まで**USPD** 党員で、再統一後は再び**SPD** の党員に戻りました。1933年まででした。そして、もう一度、つまり**SPD** が1945年に再建された時に入党しました。そして1949年にブラウンシュヴァイクで亡くなったのです。

彼は、金属労働者同盟には1933年まで属していました。その後、自動的に、いわゆる労働者戦線に移されたのかどうかはわかりません。いずれにせよ、ドイツ金属労働者同盟には、年金生活者に労働組合の財源から、少額ですが手当を支払うという制度がありました。この手当はナチ時代も支払われ続けました。この手当の支給が停止されなかったのです。このことから、父は自動的に年金受給者として労働戦線に移されたか、あるいは労働戦線がこういった年金生活者のために、この少額の支払いを続けたのでしょうか。しかし、私はその詳細についてはわかりません。もちろん労働組合の財産から支払われたのですが、宣伝活動でもありました。この手当は意味があったのです。月に25マルクか30マルクだったと思いますが、1933年当時は、年金生活者にとっては大金でした。ドイツ金属労働者同盟（：**DMV**）は、ブラウンシュヴァイクで1891年に創設され、もちろん父は、創設時にその場にいました。**SPD** には、1890年の社会主義者鎮圧法事件の直後、すでに入党していました。

母は1869年10月22日にビールヴィーゼ *Bielwiese* で誕生しました。ニーダーシュレージエン *Niedeschlesien* のグロガウ郡 *Kreis Glogau* で誕生しているので、プロイセン出身ということになります。母は村の学校に通いました。彼女の両親は、非常に早くに亡くなってしまいました。母がまだとても小さい時に、父親を失いましたが、たぶん彼女が2才の時です。そして彼女が12才の時に母親を亡くしました。だから早い時期に孤児になって、仕事に出なければならなかったのです。彼女が育ったのは、ブラウンシュヴァイクから遠い所です。彼女は学校を出てから、まずは、大きくなった場所で働きました。そして女中として、いろいろな家庭で働きました。つまり、ベルリンの近辺で働き、その内に、ある女友だちと一緒にブラウンシュヴァイクに

来たのです。この女友だちとは、多分、いわゆる雇い主の家庭同士の結びつきによって知り合いになったのでしょう。何で彼女が、よりもよってブラウンシュヴァイクに来たのか、その理由を聞いたことはありません。彼女がいつブラウンシュヴァイクにやって来たのかは、1899年にここで結婚していますから、その前でしょう。

母は、1890年代に裁縫師の女親方の家で、女中兼料理女として住み込みで働きました。その後は、臨時の仕事がある度に家内労働をしていました。缶詰工場の仕事です。母は、第一次世界大戦中はある缶詰工場で働きました。労働力が不足していたので、彼女もお金を稼げたのです。しかし、家事労働のかたわら、正式の職業について働くということはしませんでした。彼女が働いたのは、コイネ缶詰工場 *Konservenfabrik Keune* でした。

母は主に主婦だったので、彼女の失業について話すことはありません。失業手当は20年代に初めて導入されたので、それ以降は主婦としての彼女が失業手当をもらうはずありません。

母は、父と初めて結婚しましたし、結婚前に私生児を生んでもいません。流産や死産もしていません。生まれた子供たちも亡くなってはいません。母は正式の夫婦から生まれています。

母は、ブラウンシュヴァイクで社会民主党の党员で、ドイツ・フリーメーソン協会の会員でもありました。私たち家族はみな会員でした。父もです。他の組織にも所属していたかどうかまでは知りません。母は1935年にブラウンシュヴァイクで心臓麻痺によって亡くなりました。病気で亡くなったということです。これは、当時の大家族の労働者の生活の中で、ひどい苦勞をした、とても多くの労働者の妻たちが患った病気なのです。私は、女性たちがこの位の年で、疲れ果てた末に、簡単に亡くなってしまったというケースをたくさん知っています。想像もできないくらい、負担がとてつもなく大きかったのです。

私も後になってから初めて、この大家族の面倒をみるのがどんなに大変だったのかということを、理解できたものです。家族の中では、誰も落ちこ

ぼれませんでした。どの子供も何かを学び、生きる道を見つけました。一番末の妹は、当時、両親が経済的にとても困った時期だったにもかかわらず、さらに上の学校に行き、ギムナジウムの卒業試験を受けました。そして大学で勉強して教師になったのです。こんなことは、母の大きな犠牲無しには不可能でした。母は父よりも先に亡くなりました。

母は、私のことを大変高く評価していました。しかも、私のことを神のように崇めました。ひとつには、私の上には姉が二人生まれているのですが、私が最初に生まれた息子だったからです。もうひとつには、彼女は自分の兄を尊敬していたのですが、多分、私が彼女の兄を思い出させたからだと思います。その彼女の兄は遠くに住んでいたので、時々やりとりする手紙以外には、彼のことを知りようがなかったのです。つまり、彼女がしばしば言っていたのですが、私が彼女に彼女の兄のことを思い出させたということです。そして、私がそこら辺にある材料や道具を使って、上手に手仕事をし、学校の勉強も良くて、職業上もある程度は上手くいったからです。つまり、彼女はとても、とても私のことを誇りにしていました。この傾向は、感情を出さない父よりも母の方が強かったのです。私は両親のどちらとも関係は良かったのです。

母との方が、父とよりも良い関係であったとは言えませんが、父よりも母により親密さを感じていました。

## 2. 弟姉妹・祖父母について

### 〈弟姉妹について〉

私には弟が一人いました。姉妹は3人います。異母兄弟や異父姉妹などはいません。私の長姉は、1899年6月28日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。両親の結婚式の3ヶ月後です。2番目の姉は、1901年8月6日にブラウンシュヴァイクで誕生しました。そして弟が1906年4月2日にブラウンシュヴァイクで生まれたのです。さらにもう一人、妹が1908年11月1日に

ブラウンシュヴァイクで生まれたのです。

姉妹は第二次世界大戦を生き延びましたが、弟は 1944 年の復活祭の前日に、彼が働いていた工場が爆撃されて殺されました。彼の会社は、最近倒産した、駅前通り *Bahnhofstraße* のヴィルケ社 *Wilke & Co.* でした。3 人の姉妹たちは、第二次世界大戦を生き延びましたが、彼女たちは危ない時期には、ベルリンにいました。もちろん、ベルリンはブラウンシュヴァイクよりもっと危険でした。3 人の姉妹はまだ生きています。弟だけが欠けているのです。

長姉は独身のままです。他の姉妹は結婚しました。1944 年に亡くなった弟も結婚していました。詳しくは覚えていませんが、彼は 1936 年に結婚しました。他の姉妹は、第二次世界大戦中に結婚しました。その時、私はここにはいませんでした。多分、1940 年代初頭でしょう。一人は 1942 年、もう一人はもう少し早かったと思います。二人とも 1938 年に私がドイツを去った時には、まだ結婚してはいませんでした。私が再び戻ってきた時には結婚していたのです。だから、多分 1940 年代初頭だっただろうと思うのです。

長姉は、数年間、ある家庭で女中兼子守りの仕事をした後に、私立の商業学校に行きました。そしてその後、最初は女子事務員として、その後は秘書として働きました。最初は第一次世界大戦中、ドイツ軍のブラウンシュヴァイク糧食局で働いたのです。彼女は 15 才で商業学校へ行って、この商業学校に半年間、通いました。そこで軍当局のブラウンシュヴァイク糧食局に引っぱり張られたのです。そして、この職を 1918 年に辞めて、ある小さな村の飼料卸売商で働きました。戦争後にまたブラウンシュヴァイクに戻ってきましたが、これらのことはみな戦時経済と関係していました。そして戦傷病者と戦死者遺族のための社会福祉局で仕事をしました。つまり、役所の職員でした。彼女は大変賢く、大変責任感も強く、また大変勤勉でした。だから、大変早くにこの社会福祉局の女性局長の第一秘書の地位にまで昇りつめました。そして、この専門分野の仕事に習熟したのです。それが、後にこの分野をさらに極めるというきっかけともなりました。つまり、今は社会福祉大学になっていますが、当時のベルリンの福祉学校に自費で通いました。刺激になったの



は、ある同僚の女性がいて、この社会福祉局の実習生として働いていたのですが、この女性がこの福祉学校に通っていて、そして「Mさん、あなただったら私よりもずっと早く学業を終えられますよ。何故、あなたもこの学校で勉強しないのですか？」と言ったのです。しかし、彼女は医者の子の娘だったので、労働者の娘にはそんな風には思えないということを理解していなかったのです。しかし、彼女はその後にそれを理解し、姉がドアを開けるのを助けてくれたのです。つまり、そのためには教育上の前提条件を満たすことが要求されたのですが、その時点で、姉は、それを満たしていなかったのです。つまり、ギムナジウム卒業資格か中学校（またはギムナジウム6年）修了資格が必要でした。姉は、その後、この福祉学校を良い成績で卒業し、ニーダーラウズッツ *Niederlausitz* で福祉関係の仕事に就きました。しかし、1933年に政治的な理由でそこを解雇されました。彼女が社会民主党の党員だったからです。彼女は、それからまた再び頑張りました。まずベジタリアンのレストランでウェイトレスとして働きました。そうする内に、また事務職の仕事に就きました。ナチスの戦時経済の下で、さまざまな経済関係の役所があったのですが、彼女が勤めたのは、林業の経済局でした。そこでも彼女は大変良い職に就きました。そして1945年にその仕事を辞め、すぐにまたベルリンの福祉関係の仕事に就きましたが、最初は西ベルリンではありませんでした。彼女は、今は西ベルリンにいます。

2番目の姉は、裁縫師の修行をしました。裁縫師というのは、当時の労働者の家庭では、好んで娘に選んだ職業でした。よく言っていたものですが、結婚したら、助けになるよとね。つまり、子供たちや家族の衣類を自分で作ることができるからです。家事の傍ら、少しお金を稼ぐこともできます。結婚していて、家事をしているけれど、よその家の人のためにも衣服を縫うという、そういう裁縫師がたくさんいました。彼女たちは2日か3日、よその家庭に行って、裁縫仕事をして、数マルクと食事をさせてもらったのです。そういうわけで、裁縫師という職業が労働者の娘には理想的であるとみなされたのです。次姉は、最初はブラウンシュヴァイクにいましたが、その後、

ドレーズデン *Dresden* に行って、裁縫師として働きました。そして第二次世界大戦の間はベルリンにいましたが、その後ブラウンシュヴァイクに戻ってきました。

私の妹はブラウンシュヴァイク地域の教師でした。つまり、彼女はブラウンシュヴァイク近郊の村々で教師をしていたのです。インメンドルフ *Immendorf* に長くいました。

私の弟は、製粉装置製作の実習教育を受けました。その後、夜間講習で技術者試験を受けて資格を取り、その後、ブラウンシュヴァイクのヴィルケ社の工場で工場技術者として働いていたのです。彼も失業したことがあります。その後、軍需景気でふたたび仕事に就きました。再びパンにありつけたことを喜びました。失業者の数は限界に達していましたからね。

この弟の妻はブラウンシュヴァイク出身の女性労働者でした。

次姉の夫は薬局の店員でしたが、その後、1945 年後に薬局店主になりました。

妹の夫は、機械製作工なのですが、精密機械工業の機械製作に専門化しました。その後、ジャーナリストになり、その後さらにニーダーザクセン州の省報道官となりました。しかし、私が大臣になる前でした。1945 年後にジャーナリストになり、ベルリンでジャーナリストの仕事を始めたのです。しかし、SED の創設と、また彼がベルリンで SED に敵対する活動をしたことによって危なくなり、ハノーファーに来たのです。私の姉妹や弟は離婚したことはありませんし、私生児を生んだりもしていません。

私は、長姉といちばん良く理解し合っています。彼女が母に替わって、たくさんのお家事仕事をしていたのを覚えています。彼女は、いつも母親のように、弟妹たちみんなの面倒を見ていたのを思い出します。それは簡単なことではありませんでした。彼女は、子供の頃から母親役を引き受けていたのです。私と一緒に学校の宿題を見てくれましたが、良くできなかつたら、辛抱強く教えてくれました。大家族の中で大変だったのですが、当時は、家族というものは、そんなに簡単にはそこから逃げだすことができない、運命共同

体でした。長姉は、1928年に、何とか自由に泳ぎ回るようになりました。職業のために、家族から自分を解放し、とてもきびしい条件の下で、職業教育を受け、福祉士になりました。福祉士になるための実習もし、福祉士の試験を受けて資格も取って間もなく、しかし、再び政治的な理由からキャリアを遮断されたのです。

### 〈祖父母について〉

私は両親の親を4人とも知りません。母方の祖父母は、私が生まれるずっと以前に亡くなっていましたから、知ることはできませんでした。父方の祖母は、父の誕生直後に亡くなりました。出産が直接の原因だったのでしょう。父方の祖父は、私のことを見ていたのですが、私は彼のことを記憶していません。だから、私は大体の推測でしか言えませんが、父方の祖父は70才から80才の間か、75才から80才の間に亡くなったと思います。父の母親は、7人の子供を生みました。私の父は末っ子でした。1年半から2年の間隔で子供たちを産んだとして数えてみると、7人の子供ですから、12年間です。彼女はおそらく40才で亡くなったのでしょう。

多分。母方の祖父は、70才以下だったと思います。60才から70才の間でしょう。母方の祖母は多分50才頃に亡くなったのでしょう。祖父母の内の誰もブラウンシュヴァイクにも近郊にも住んではいませんでした。当時の感覚としては、遠い土地に住んでいたのです。母方の祖父母は、ニーダーシュレージエンのビールヴィーゼで亡くなりました。

父方の祖父母は、ザーレ川沿いハレの近郊のブルックドルフで亡くなっています。親戚付き合いが密だったし、ザーレ川沿いハレは、地理的にもまだ近かったのです。私たちにとっては行きやすかったです。子供の頃、長い休暇の間はよくハレで過ごしていました。そうすると、うちの家族にとっては負担が軽くなったからです。第一次世界大戦に入る時期でもありました。それに、祖父が食糧を扱う田舎の家だったので、つまり、製粉所と穀物商とパン屋を営んでいたから、食べ物に困らなかったのです。この父方の祖父は、製

粉装置造りの大工で、製粉用の風車小屋の持ち主でした。風車を造り、それで商売をしていたのです。

母方の祖父は、自分を自由農園師と言っていました。つまり、彼は小さな農園を持っていて、そこで果物や野菜を作っていました。商業的な農園ではなかったのです。どちらの祖母も仕事はしておらず、主婦として家族のために働いていました。主婦が彼女たちの職業でした。祖父たちは、どちらも自営業でしたから。祖母たちは、それぞれ祖父の仕事を助けていたのです。いや、助けるどころか、1日に20時間も働いていたと言えます。そういう意味では普通の主婦とは違います。

### 3. 両親の家の住居

私は、今はフーゴ・ルター通り *Hugo-Luther-Straße* に住んでいますが、当時のヴェスト通り *Weststraße* 59 a 番の両親の家で生まれました。他の姉妹や弟たちもこの両親の家で生まれました。ここには、かなり長く住んでいました。つまり、私が生まれた時点で、すでに私の両親はもう何年か、そこに住んでいたのです。多分、2年くらいかと思います。両親は1923年までその住居にいました。この住居はとても狭いものでした。2部屋と台所に、比較的大きな、洋服タンスを置くこともできる玄関ホールがありました。地下には物置がありました。物干し用の共用の大きな屋根裏部屋もありました。浴室はありませんでした。トイレも住居内にはありませんでした。しかし、階段室に私の家族専用のトイレがありました。1908年に5人目の子供が生まれてからは、この住居に7人で暮らしていました。その後、一番上の姉が学校を出て、女中の仕事に就いた時に、人数が減って、また6人になりました。祖父母や親戚などは、一緒に住んではいませんでした。私は、1922年までずっとこの住居に住んでいました。1922年から23年までの1年間、仕事の関係でブラウンシュヴァイク以外に住んだのです。ガンダースハイム *Gandersheim* 近郊のアルト・ガンダースハイム *Alt-Gandersheim* です。1923年にまたブラ

ウンシュヴァイクに戻りました。この時から、ふたたび両親の住居に住みました。つまり、父が23年に失業したので、両親を援助するためでした。

1923年から両親と一緒に住んだ住居の住所は、カーラント通り *Kalandstraße* 10番でした。1929年まで、ずっとここに住んでいたのです。途中、6～8ヶ月の間、ここを出ていました。社会政策上の問題が生じたからでした。私は比較的収入が良かったので、私が両親の住居に住んだら、私の弟も養わなければならなかったからです。つまり、失業扶助や危機扶助の規則は、一緒に暮らす家族の収入をすべていっしょくたにして計算したからです。そんな風に暮らしていた家族は、当時、多かったのです。つまり、たとえば私の弟は、失業手当をもらうために引っ越していきました。彼も失業したのです。だから、カーラント通り10番に住んだ人数は、その時々で変わりました。それに、私の一番上の姉は、まず女中の仕事に就いて、家を出たのですが、また家族の元に戻ってきました。そして、その後また第一次世界大戦中にブラウンシュヴァイクの郊外のある村で働きました。食糧事情が良かったのと、家族を援助するためでもありました。その後、彼女は、また職業上の再教育のために1928年頃に家族から離れて自分の職業上の道を選択したのです。姉が早くに家を出ていたのです、この両親の住居にほぼ6人で住んでいました。ここでも親戚は一緒に住んではいませんでした。このカーラント通り10番の住居は、住宅協同組合が20年代に建てた、3部屋の住居タイプで、ヴェスト通りの住居よりは少し大きかったです。住居内にトイレと大きな玄関ホール、3部屋に台所がありました。地下の物置と物干し用の屋根裏部屋もありました。トイレは住居内にありましたが、浴室はありませんでした。この住居には両親と姉妹や弟以外の親戚などは住んでいませんでした。

私が8ヶ月間、両親の家を出て住んでいたのは、労働組合青年部で知り合った友人の母親の住居で、ブラウンシュヴァイクのフランクフルター通り *Frankfurter Straße* でした。彼女は、寡婦として非常にわずかな収入だったので、部屋を又貸しして、いくらかの副収入を得ていたのです。彼女からの

又貸しで一部屋を借りて、ひとりで住んでいました。1929年のことでした。番地は覚えていませんし、この家はもうありません。この住居は古い建物でしたが、比較的大きな住居で、たくさんの部屋がありました。彼女の住居には、4部屋以上はありましたし、台所もありました。この家は4階建ての、古いタイプの賃貸住宅でした。分譲住宅でもありませんでした。この家には、詳しくはわかりませんが、4家族が住んでいたと思います。この住居は、私とは親戚関係のない、個人所有のものでした。多分、月35マルクの部屋代を払っていたと思います。

そして、この後、また1929年に両親の住居に引っ越したのですが、両親はもっと大きな住居に移りました。この住居は広くて、稼ぎの良い私が援助できたので、家族にとって経済的でしたから、両親と一緒に住む意味があったのです。この住居は、ヘンゼルマン通り *Hänselmannstraße* 7番にありました。ゲオルク・ヴェスターマン通り *Georg-Westermanallee* とカスターニエン通り *Kastanienallee* の間にありましたが、ゲオルク・ヴェスターマン通りの方に近い通りです。この住居には広い4つの部屋に浴室がありました。きちんとしたトイレのある浴室でした。大きな台所とその他に広い廊下がありました。同様に地下と屋根裏部屋もありました。いずれにしても、以前に住んだどの住居よりも、どの点で比較しても広い住居でした。ここには、また6人で住みました。同様に親戚は一緒に住んでいません。他人も住んではいません。ただ、ときどき他人と一緒に住んでいましたが、間借り人としてではありません。この住居には1930年代を通してずっと住んでいました。

#### 4. 近隣の労働者居住区域の様子

私が生まれた家のあったヴェスト通りは、工場街界限にあるまぎれもない町外れの通りでした。主に労働者の家族が住んでいました。家々は、部分的にはブラウンシュヴァイク住宅協同組合の家で、しかもブラウンシュヴァイク住宅協同組合で建てた最初の家々でした。煉瓦の、堅牢な造りの家でした。

中の造作は快適にはできておらず、質素でしたが、当時としては健康的に住むことができる住居でした。なかんずく、低い家賃と家主に追い立てを食らう心配がないというのが大きな魅力でした。この通りは典型的な労働者の通りでしたが、すべての家々が住宅協同組合のものだったわけではありません。民間の家もありました、部分的には古い家もありました。本当に労働者の住む町外れの通りだったのです。

カーラント通りは、同じ区域にあったのですが、この辺りはヴェスト通りとは少し異なった種類の住民でした。この通りには、すでに小公務員、鉄道員、郵便局員が住む家々がありました。国民学校の教師が住んでも良いような家々のある通りもありました。こういう所に、ブラウンシュヴァイク住宅協同組合が土地を買収して、住宅協同組合の新しいタイプの家々を建てたのです。だから、この通りは純粹に労働者の通りではありませんでした。しかし、きちんとした家庭の人々が住んでいたのも、私の家が労働者だからといって、問題が起こるなどということはありませんでした。

ヘンゼルマン通りは、今とまったく同じ様相でした。この通りは戦争で破壊はされませんでした。ブルジョワ的な特徴のある通りでしたが、ここもまた空き地を住宅協同組合が買収しました。ここでは、住宅協同組合の家々と他の家々の間には、明確な違いがありました。1930年代の選挙戦では、旗が使われたものです。ナチスが始めた事ですが、選挙の前にみな、その支持する政党の旗を家の外に掲げました。黒・赤・金の旗か、あるいは赤旗か、または黒・白・赤の旗か、あるいは鉤十字の旗でしたよ。そうすると、住宅協同組合の家々と他の家々の間には、はっきりとした違いができました。他の家々は、黒・白・赤の旗と鉤十字の旗でした。黒・白・赤の旗よりは鉤十字の旗の方が多かったです。住宅協同組合の家々では、黒・赤・金の旗が優勢で、そしてときたま赤旗が掲げられていました。それが社会民主主義者たちの通りだったのです。

ニッケルクルク *Nickelkulk*, ヴェルダー *Werder*, ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerkerstraße*, ランゲ通り *Lange Straße*, クリント *Klint* などの古い

市街地についても覚えています。「ランゲ通り、クリント、ヴェルダーでは用心しなきゃいけない。マウアーン通り *Mauernstraße* がそれ以上に良いってわけでもないのさ。その通りには人喰いがいるんだ」と言っていたものです。それらの通りはみな旧市街にあったのですが、どれもこれも同じというわけでもなかったのです。マウアーン通りは、小さな敷地に家々が並ぶ、大変狭い通りで、市の城壁のすぐ背後にできたので、その城壁という意味のマウアーが通りの名前になりました。ここには労働者が住んでいました。しかし、多くの小自営業者も住んでいたのです。私は、例えば、陶器を商うある家族を知っていました。彼らは、市場へ行き、そこで花瓶などの道具を並べ、それを売って生活していたのですが、マウアーン通りに住んでいました。もちろん労働者も住んでいました。

それからランゲ通りですが、ここには他のどこにも住み処を見つけられないような労働者が住む家々があったのです。ランゲ通りに住んでいるということは、恥でした。特に、通りの裏側の家に住んでいる場合は、恥でした。労働者政党間の衝突があると、強調されたものですが、そういう家には、非常に多くの共産党員が住んでいました。まあ、何と言えよ良いのか、零落したと呼ばれる、あるいは労働者階級以下と言えよ良いのか、そういった労働者が住んでいたのです。そういった労働者の住む家の間に、又、良い暮らしの手工業者が住む家がありました。ガラス職人の親方とか木工製品商などが入り乱れて住んでいたのです。だから、純粋な労働者居住区域ではなかったのですが、しかし、これらの通りはある種の汚名を負っていました。私には、仲の良い知り合いがいました。この知り合いは、零落した労働者家庭としてランゲ通りに住むことになったのです。それから、ひと組の若い夫婦が他の場所に住居を持ちたいと思ったのですが、家主が「ランゲ通りから来たって？ いいえ、そんな人たちには部屋を貸せません」と言ったのです。それで、私が彼らを支援しました。当時の、良く聞こえた私の名前でもってね。彼らが別の住居に入れたのは、30年代のことでした。ランゲ通りに住んでいると言うと、悪く評価されたものです。



クリントもそういう地域でした。こういった地域は、今ならスラムと呼ばれる場所です。そこには、物を持っていない、いちばん安い家賃の、小さな、狭い住居に住む人たちがいました。しかし、これらがブラウンシュヴァイクの決定的な労働者居住地域ではありませんでした。

決定的な労働者居住地域は、町外れの地域でした。マリーエン通り *Marienstraße* やヌスベルク通り *Nußbergstraße* などの市の東側に位置する、1900 年頃にできた地域はみなそうです。クロイツ通り *Kreuzstraße* の辺りもです。ヴェスト通りがあったウィルヘルミトア界限 *Wilhelmitorviertel* もです。ヤーン通り *Jahnstraße* やユリウス通り *Juliusstraße*、フィルコフ通り *Virchowstraße*、エクベルト通り *Ekbertstraße*、ベルクフェルト通り *Bergfeldstraße* もです。この地域には市中よりも多くの労働者が住んでいました。

もちろん、市中にも組織化された労働者は住んでいましたが、こういった地域にも組織化された労働者が住んではいました。しかし、数の上からは、それほど多くはありませんでした。これらの工業化の後にできた周辺地域は、旧市街の居住地域よりも、労働者の居住地域としては、ずっと重要でした。

文書館で見ることができますが、大きな市街地図があります。この地図でこの町外れの地域がどのように形成されてきたのかを知ることができます。旧市街の住密度は、もちろん非常に大きかったのですが、ナチス時代に一度、町の再開発がありました。それは、フレッシエ教授 *Professir Flesche* によって実施されました。フレッシエは、ナチスではありませんでした。有能な都市計画者であり、有能な建築家でした。そして彼は、この市の拡散化をちょうどベッケンヴェルカー通り *Bekkenwerkerstraße* の地域で、それはつまり、ランゲ通り、ベッケンヴェルカー通り、ヴェーバー通り *Weberstraße*、カイザー通り *Kaiserstraße* の4つの並行した通りのことですが、この辺りの通りの裏庭を整理したのです。これによってこの地域は、かなり広々としました。そこに住んでいた人々が移住させられて、私たちが今住んでいるジークフリート地域へ移住してきたのです。そして、今もなお、ここには労働者がい

て、ここは **SPD** 地域なのです。世代交代によって政党支持が変わってきてはいますが、一連の **SPD** の伝統はかなり長く維持されています。つまり、例えば、私が大きくなったウィルヘルミトア界限や、……まあ、つまりブラウンシュヴァイクは長い間、異論の余地の無いほどに帝国議会選挙の際は **SPD** の選挙区でした、帝国の時代においても。ウィルヘルミトアは、**SPD** だけを選んだ地域のひとつでした。他の政党は問題にならないのでした。

ブラウンシュヴァイクでは、まず 1928 年に住宅建設の大プロジェクトが実施されました。このジークフリート *Siegfried* 地域全体です。この大きなプロジェクトによって、それ以前には実施されることがないほどの、大きな規模の団地が新しく建設されたのです。これは、市の拡大、改善、住居数の拡大等のための、最初の決定的な都市計画でした。戦争直後、新しい郊外団地がいくつかありましたが、例えば、レーンドルフ *Lehndorf* のレーンドルフ旧団地、ノイペトリトア *Neupetritor* の戦傷者用団地です。これらの 2 大団地によって、ワイマール共和国時代全体を通しての住宅不足は、緩和されはしたものの、克服はされませんでした。1936 年に、私がブラウンシュヴァイクを去るときには、まだ住宅不足でした。私は、当時、ハノーファーに行き、住居を交換しました。相手の方が、そうでなければブラウンシュヴァイクで住居を見つけられなかったからです。

## 5. 学校生活

ブラウンシュヴァイクには、2 種類の国民学校がありました。つまり、いわゆる下級高等小学校 *Untere Bürgerschule* と中等学校 *Mittlere Bürgerschule* です。どちらも後に 7 年制市民学校と 8 年制市民学校と名前を変えられました。「下級」と「中等」という名称をなくしたかったのです。私の通った学校は、ゾフィー通り *Sophienstraße* にありました。この学校に 1909 年から 1917 年まで通いました。つまり、私は 5 歳半の子供の時に学校に上がったのです。1909 年の復活祭に入学したのですが、父が特別申請書を出したから

です。父は私と一緒に校長の所に行きました。ある日曜日のことです。校長は、日曜日に、私たちと話すために学校にいてくれたのです。父は「この息子を学校に入れてほしいのです。この子は賢く、学校で勉強するのに十分、成熟しています」と言いました。そして私はといえば、母から離れたいと思っていたのです。母はすることがたくさんありましたから。そうすると、視学官が私を見て、「ところで彼は健康なのかね？」と言った後、私と少し話して「じゃあ、いいだろう」と言いました。こうして普通よりも早くに学校へ上がったというわけです。

学校では大変、規律が厳しかったものです。つまり、行動に関する厳しい規則がありました。教室で座席にきちんと座っていると、つまり、例えばベンチに3人で座っていると、その後もそのままの3人で座らなければいけないし、授業中にお互いに話をしてはいけない、授業中、窓から外を見てはいけないなどです。規律にうるさい教師の典型のもとで、とても厳しいクラスの規則が作られたのです。つまり、ちょっと窓から視線を投げて、彼がそれを見つけると、それは注意力散漫であり、欠陥であるとされるのです。彼は、「注意力違反」を縮めて「注」と言いました。あるいは、鉛筆を下に落とします。すると、「誰がやった？ 秩序！」と言うのですが、それは「秩序違反」ということでした。毎日、授業が終わる時、彼はクラスの名簿を手に取り、アルファベット順に読みます。その際、彼は皆の名前を縮めて呼んだものです。その方が早く終わるからです。呼ぶ時に、「秩序がひとつ」とか「注が一つ」、あるいは「違反なし」などと言います。1日に同じ違反をふたつした者は、尻を棒で一発やられました。生徒が学校で殴られるなんてことは、頻繁にありました。私は学校では、ほとんど殴られたことはありませんでした。それは、私が一つには、きちんとした生徒であったこと、そして二つ目には、良い生徒だったし、強情な生徒でもなかったからです。しかし、私はしばしば他の生徒たちが教師に殴られるのを見たものです。それは、ひどいものでした。私の場合、8年間の学校生活中でたった2回だけ殴られたことがあります。とても軽いものだけでした。その時だって、私は「まあ彼は、

そんなに殴らないさ」という印象をもっていたくらいです。

特に良い体験は、クラスで遠足に行ったことや、あるいは科目としての博物、今でいう生物でした。私たちの頃は、物理、科学、生物がみな一緒にされて博物という科目だったのです。春になると、その教師が「この学校の中で何をするっていうのだ？ 外に出かけよう」と言いました。そうすると、私たちは道路を歩き、前庭を抜けて歩いて行くのですが、その途中で、私たちが前庭や土手で見つけた植物で、彼は博物の授業をするのです。彼は、この授業をととても興味深く行いました。あるいは、年に一度の遠足をする時には、つまり、毎年、一度だけ遠足があったのです。たった一度だけでしたが、この遠足でも、彼はまったくリラックスして、愉快そうでした。しかし、私たちにたくさんの興味深いことを話して聞かせるために、時間を使い切っていました。あるいは彼が休暇中に旅行をすると、その旅行の様子をととてもいきいきと話して聞かせたので、記憶に残りました。ある時、彼はローテンブルク・オブ・デア・タウバー *Rothenburg ob der Tauber* のことを話してくれました。そして20年後に、私がローテンブルク・オブ・デア・タウバーを訪れた時、「みんな知ってるさ。みんな知ってるとも。みんな、すみずみまで正確に、彼が教えてくれたとおりだ。」と叫んだものです。あるいはベルリンについても同じです。ある時、彼はベルリンの地図を黒板に貼って、ベルリン旅行の話をしてくれました。そして、多分、その7年後だと思いますが、私は初めてベルリンへ行きました。そして地図も持たずに、街の中を歩き回ったものです。彼が語ってくれたことがすべて、ありましたよ。彼の語り聞かせてくれたことが私の記憶にこびりついていました。

1917年に国民学校を出た後、上の学校には進みませんでした。私は8年間の国民学校を、非常に良い成績を修めて終え、修行に入りました。私が職業教育によって得た職種は工業セールスマンです。本当に多くの技術的なことも学びましたが、おもしろかったし、いろいろな意味で私の助けになりました。修行は1920年までの3年間続きました。工業地域用の電力会社で、ブラウンシュヴァイク広域電力会社 *Überlandwerk Braunschweig GmbH* とい

う名前で、本社もブラウンシュヴァイクでした。修行を終えた後、この会社が他の会社と合併するまで、工業セールスマンと会計係として働きました。この会社が、ハノーファー・ブラウンシュヴァイク電力供給会社 *Hannover-braunschweigische Stromversorgung* に合併されるまでは、ブラウンシュヴァイクやガンダースハイム *Gandersheim* の農村部、そしてハルツ地方のランゲルスハイム *Langelsheim* の支所で、そして後にハノーファーで働きました。

## 6. 子供時代の労働と遊び

子供時代には、私は弟と一緒に、数年間ですが、ブラウンシュヴァイク自由体操協会 *Freie Turnerschaft Braunschweig* に入っていました。両親が会員だったのか、それとも子供が会員として登録されたのか、協会員になる規則などについては知りませんが、いずれにしても、自由体操協会に入っていたのです。多分、1914年から1917年までだったと思います。戦時中でした。

子供の頃は、小遣い稼ぎにえんどう豆のサヤの筋取りをしました。これは休暇中の労働で、ナイフでサヤの筋を取るのです。これは臨時の仕事で、いつも働いていたわけではありません。それに私たちは、何年間もエンドウ豆摘みをしました。シュレージエンでの自由農園主というのは、こういう風でした。つまり、祖父母は缶詰工場のために野菜耕作をしていました。そして、エンドウ豆が成熟すると、そこら辺に「エンドウ豆摘みを募集しています」と触れ回ります。そうすると、私たち3人か4人の子供たちも母と一緒に豆摘みに行くのです。代用コーヒーの瓶とラードを塗ったパンを何枚か持っていくのです。そうして、朝から晩まで畝の取り入れが済むまで働きました。エンドウ豆 50 kg 当たりいくらという形でお金が支払われました。私たちは、出来高払いでエンドウ豆の摘み取りをしたのです。畑に行って、エンドウ豆畝の一畝をつみ取ると、夕方に摘み取った豆の重量が計られます。そしてエンドウ豆の収穫量分としてその日の賃金をもらうわけです。私たち子供らは、

1日に1マルク稼ぐと、とても誇らしく思ったものです。私たちは、こんな方法でいつも休暇中に親戚の家に行くための汽車賃を稼いだのです。エンドウ豆摘みを始めたのは、私が9才の時でした。戦争中もこの仕事をしましたが、修行に入るまで続けました。

学校で最後の冬のことでしたが、学校へ行っても暖房できないので、閉校することになりました。そこで先生が、私たち6人の生徒にある肉の缶詰工場で働く仲介をしてくれました。その工場で私たちは6週間働いて、お腹いっぱい食べることができました。1916年から17年にかけての冬でした。もちろん、稼いだお金は両親の家計に入りました。私の小遣いにはなりませんでした。私たちは貯金箱を持っていて、それに数枚の硬貨を入れることはできましたが、ここで稼いだお金は、すべて家族の金庫に入れられたのです。それは当然のことでした。そんなことを、つらいなどと思ったことはなく、当然のことだったのです。

子供の頃、母に替わって、家事仕事を引き受けました。私たちは、ナイフ磨き、靴磨きなどをしました。労働者の家庭では、父親が自分で靴底を張り替えるなどのことは、当時では普通のことでした。私は、靴底の張り替え方をとても早く飲み込みました。そして、まだ学校に行っている間に自分の靴底を張り替えました。私は、5才か6才の時には、すでに家事仕事を手伝っていました。普通のこととして手伝いをしていました。私より小さい弟や妹がいましたから、「小さなや弟妹をみていなさいよ」というわけです。

私たちは家庭菜園も手伝いました。畠の鋤き返しや、ジャガイモの植え付け、いちご摘みを手伝いました。菜園に肥料をやるために、通りで馬の糞を集めました。家事は、主に母が負担していました。もちろん姉たちも、家事全般を助けていました。長姉は、大変、大変たくさん家事を助けていましたが、主な負担は母にかかっていたのです。

子供の頃、遊ぶための自由な時間が少ないと感じたことはありませんでした。私は、当時の子供としては一般的な生活をしていました。私たちは朝の7時か8時に学校へ行き、お昼に家へ帰って来ました。時々、午後はまだ

学校がありました。時々でした。近隣に住む子供たちとコンクリートの中庭で遊ぶ時間がありました。私たちの家のすぐ隣の集落に古い墓地があったのですが、そこに草ぼうぼうの空き地がありました。そこが、思いっきり飛び回れる、私たちの緑の絨毯だったのです。近くの通りでも遊び、季節によっては、暗くなってからも通りへ遊びに出て行ったものです。冬には、近所の狭い場所でしたが、氷が張ると、そこでスケートで走り回りました。学校で少しスポーツもしましたし、体操協会にも行きました。だから、いろいろな事をして、一日は過ぎたものです。

私にとって、学校の宿題は大変ではなく、あっという間に、非常に早く終わっていました。国民学校の勉強は、誇張ではなく、私はぜんぜん負担に感じなかったのです。私は学校で問題を遊びながら片付けました。家での宿題は、30分で片付けたりしました。どんな宿題もととても早くできたのです。私には、同じ環境の同じ年頃の子供たちと同じだけ、自由に遊ぶ時間がありました。

私たちが遊んだ場所は、わざわざ遊び場として作られた場所ではありませんでした。大きな場所を見つけると、そこを遊び場として占領して、遊んだのです。私達の住む集合住宅の家の中庭でも遊びましたが、ここではいつも衝突があったのです。ここには、約30名の子供たちが暮らしていました。25名だったかもしれません。隣の家にもそれくらいの人数の子供たちが暮らしていました。それは2軒続きの家でした。だから、この狭い場所で飛び回って遊ぶ子供たちのグループは巨大だったわけです。もっと場所が必要なときには、墓地や通りに行きました。当時は、車がほとんど通っていませんでした。聖ミハエリス墓地 *Sankt Michaelis-Friedhof* です。これはヴェスト通りにありましたが、今も同じ通りにあります。一緒に遊んだのは、同じ年頃の子供たちで、誰とでも一緒に遊びました。

通りでは、チョークで線を引いて面を作り、ある規則にそって、その上を跳んでいくのです。その他にも、球で、小さな陶製の球を使う遊びもしました。陶製の球でなければ、後に **MIAG** 社に吸収された、ルター工場の重い鉄球を使いました。この重い鉄球は、セメント工場か、大きな球置き倉庫か

ら父親たちが家に持って帰ってきたものです。この線の上を飛んでいく遊びや球遊びなどの集団遊戯、つまり遊びという遊びは何でもして遊びました。子供は、いつだって遊びを工夫するものです。遊びには、一年の内にも決まった時期があるのです。たとえば、ひもで回す独楽遊びは、毎年、春にしました。遊び仲間の子供たちは、兄弟姉妹とか親戚、学校の同級生とかの区別なしに、ごった混ぜでした。近所の子も、年下の子もみな一緒でした。

## 7. 親子関係

子供の頃も少年の頃も、私の個人的な問題について、両親と話し合ったことはありません。私は、15歳の時から父と激しい政治的な議論はしましたが、両親と衝突したことはあまりありませんでした。私の革命や革命の課題に関する判断は、彼の判断とは異なっていました。つまり、父は社会民主党員でした。そして「社会主義というものは、過半数の人々が望めば、おのずと実現するものなのだ」と言っていました。それに対して私は、当時、「今や、まさにいつも私が思い描いたような社会主義が実現されなければならない。我々はいまや権力を持っている、あるいは持ちうるのだから、それを実現しなければならないのだ」と主張したのです。父は、当時、穏健な立場をとっていました。彼は「民主主義」という言葉をまじめにとっていました。私は「民主主義」を彼ほどにはまじめにとっていませんでした。

母とも衝突したことはありませんでした。母とも政治的なことを話しましたが、母も政治的な出来事に対して、いろんな点で、とても批判的でした。労働者組織の政治的な実践に対しても、彼女は自分の基盤から外れることなく、批判的な意見を述べました。彼女は自分の信念を持っていました。

子供の頃に両親からお仕置きを受けたことはありますが、滅多にありませんでした。本当に体罰を与えて懲らしめるということは、私の家ではありませんでした。父も母もです。私が最後に一発くらったのは、12歳になる前でした。父からも母からもです。



私は、性の問題について両親から説明を受けたことはありません。

両親の家でお金について話されたことはあります。「家賃を払わなければならないからお金が必要だ」とか、「ああ、あれとそれは、お金がないからできないよ。高すぎる」といった具合にです。それほど頻繁にはなかったけれど、受け入れるのが鉄則でした。もちろん、子供たちはそういった話の中に入っていました。子供たちが欲しい物を希望すると、母が「いいえ、そんな物は買えないわ。お父さんが稼いで家に持ってくるのは、いくらいくらなのよ」と言いました。それに対して、他の家と比較して言いつのると、「あその家のお父さんは植字工なの、彼は1週間に20 マルクも多く稼いでいるの」と答えたものです。

## 8. 結婚

私の妻の名前はフランツィスカ *Franziska* です。彼女は1905年1月30日にヘルムスドルフ *Hermsdorf* で誕生しました。ヘルムスドルフは、フリーデブルク *Friedeburg* 郡ヘルムスブルク *Hermsburg*、つまり、今はポーランド領になっています。

私たちは1928年に最初に会っています。つまり、ISK（：国際社会主義闘争同盟）のある集会で知り合いました。私たちは二人ともISKのメンバーでした。妻は、ヴァルケンミューレ *Walkenmühle* へ行き、それでメンバーになったのです。私たちは、妻がもう一人のヴァルケンミューレの女子生徒と一緒にブラウンシュヴァイクに来て、表面的に知り合ったのです。それからゲッティンゲン *Göttingen* でISKの連邦会議があつて、そこで再会したのでした。それから彼女は、ヴァルケンミューレの学校を終了した後に、ブラウンシュヴァイクの地域を労働する場として選んだのです。そして最初にヴォルフエンビュッテル *Wolfenbüttel* に行つて、そこからブラウンシュヴァイクにやって来たのです。つまり、私たちは、政治活動の中で知り合ったというわけです。私には、妻と知り合う前に、労働組合の青少年部で知り合った、女

友だちがいました。特定の女友だちができたのは、私が 21 才の時でした。

私たちは 1934 年にブラウンシュヴァイクで結婚しましたが、教会で結婚式は挙げていません。妻は結婚した当時、教会から脱退していました。妻は、ハノーファーの労働者家庭の出身です。妻がまだ子供の時に、一家でハノーファーに出てきたのです。だから、私の妻は実質的にはハノーファーっ子です。彼女は学校を卒業した後、女子労働者として工場へ働きに行きました。それからレオンハルト・ネルソン *Leonhard Nelson* と、そして後には ISK と密接な関係があった、哲学・政治学アカデミーによって運営されていたヴァルケンミュレの学校へ行きました。ここで 3 年間の教育コースを終了しましたが、このコースは教養と政治学教育でした。だから、職業的にはそんなに意味はありませんでした。私と結婚した時は労働者でしたが、結婚後は働いていません。しかし、亡命中にまた 1939 年から働き始めました。私が亡命して 1 年後に、彼女も亡命してきたのですが、その間にベルリンで製図技術者としての職業教育も受けていました。ドイツではこの職業で働きませんでした。私たちが亡命していたイギリスでは、この職業教育が役に立ちました。

妻の父はハノーファーのハノマック社 *Hanomag* で働く労働者でした。妻の母は、故郷では農場労働者でした。ある大きな農場で生活していたのです。そしてハノーファーでは、生計を助けるために、通いの洗濯婦として、洗濯婦を雇うことのできた他の家庭で働きました。私の妻は 1925 年頃には両親の家から出ていました。メルズンゲン *Melsungen* のヴァルケンミュレの学校の後のことですが、その後ももう両親の家には戻りませんでした。彼女はヴァルケミュレからヴォルフエンビュッテルへ行き、その後、ブラウンシュヴァイクへ来たのです。すべて政治的な理由からでしたが、その後、1933 年までブラウンシュヴァイクで生活しました。それから少しの間ケルン *Köln* で働きました。そうして又、ブラウンシュヴァイクに戻ってきたのです。多分、1933 年か 34 年でした。彼女は戻ってから一部屋を借りて住みました。住所はガウス通り *Gaußstraße* 26 番でした。

1933 年以前は、私たちには結婚する時間的な余裕がありませんでした。というか、半々だったのです。私の妻は私に結婚を迫らなかったのです。彼女のプライドがそんなことを許さなかったのですよ。私が結婚をほのめかさなかったなら、彼女は絶対に結婚しようとは言わなかったでしょう。彼女との結婚以前に、私は他の女性と婚約していたことはありません。

私の妻は、学校を出た後、工場に女子労働者として働きに行き、すぐに——いずれにしても間もなく——労働組合に組織されました。食糧・嗜好品労働者同盟 *Nahrungs- und Genußmittelarbeiter-Verband* でした。その時、彼女はハノーファーのチョコレート工場で働いていたのです。それから、労組員になった後、若い娘でしたが職場で労組のための宣伝をしました。その職場で働いている若い娘たちを労組員として獲得し、そのためにすぐに職場で処罰を受けました。彼女はその前から SPD の党员でした。その他には、学校を出てまもなく、彼女が堅信礼を受けた地区教会の青少年グループに所属していました。まず、友人たちが彼女を労働者青少年 *Arbeiterjugend* へ誘おうとしました。しかし、彼女の父親が——彼も古くからの社民主義者でした——「女の子がこの新教の青少年グループに入るといふなら、入るがいいさ。その方が労働者青少年の間でよりも大事に扱われるだろうから」と言ったのです。彼が言ったことは、おそらく正しかったでしょう。どういう風にして彼がそんな判断をしたのか、詳細はわかりません。しかし、若い娘は、この教会の青少年グループの中にいた方が、1920 年の労働者青年グループの中よりは、より大事にされ、守られたでしょう。妻は、後に、SAJ にも加入しました。彼女は、後にこの教会のグループから離れたのですが、これはすでに政治的な決断だったのです。そして、SAJ に入り、ハノーファーで労働者禁酒同盟にも接触したのです。しかし、彼女が会員だったかどうかは知りません。そこで彼女は IJB のメンバーと知り合い、——ここでは私たちはまだ知り合っていないませんでした——そしてこれらの IJB のメンバーにヴァルケンミュレへ行くことを勧められたのです。これはネルソンが創設した学校でした。つまり組織のひとつだったのです。彼女は経営協議会の評議員になったこと

はありません。彼女は、その後、ここブラウンシュヴァイクの光学器械工場のフォクトレンダー社 *Voigtländer* で働きました。ここで彼女は労組の職場役員として非常に積極的に活動しましたが、経営協議会の評議員ではありませんでした。1930年代のことでしたが。私たちには子供はいません。私たちに子供がいなのは、本質的にはアドルフ・ヒットラー *Adolf Hitler* に起因しているのです。まだ1933年から38年まで、私たちは二人とも、非合法活動をしていました。1本の足どころか1本半分の足を刑務所あるいは強制収容所に掛けてです。だから私たちはとてもそんな状態で子供に責任をもてませんでした。そして亡命し、非常に不安定な生活でしたから、同じ状態でした。

## 9. 性・避妊・中絶について

性についての知識は、職業学校で、当時は商業青年職業学校 *Kaufmännische Fortbildungsschule* と呼ばれていた学校ですが、そこで得たのです。この学校で、仲間同士で話していました。それに、職業学校の卒業を前にして、公式に設けられた講演会がありました。教師がこの講演会の準備をしたのです。卒業する学年の生徒が一同に集められて、性について話されたのです。性病についての、スライドを見せながらの話だったと思います。ここでは避妊については話されませんでした。

職業学校でのそういった講演会の後に、避妊などについての啓蒙的な性教育はありませんでした。どのようにして子供ができるのかとか、どのように子供ができるのを防ぐかなどについて、説明はありませんでした。

性に関する事柄については、労働者の仲間以外に。他のどこで知ることができるでしょう。スイスの学者のフォレル *Forel* の性問題についての本が、青少年労働者の間でかなり広まっていた。例えば、私は共産党の青少年と緩い付き合いがあったのですが、彼らとも話しましたが、他の青少年グループでも同じことが起きました。労働者青少年グループには成熟した、繊細な

感情をもった人間がいました。私は彼らを獲得しようとして、性について話をしました。その後、1920年代になって、マックス・ホーダン *Max Hodan* の本が出ました。たしか『少年と少女』というタイトルでした。その後、マグヌス・ヒルシュフェルト *Magnus Hirschfeld* の本が出ましたが、それは青少年グループの仲間には複雑すぎたので、読みませんでした。

避妊について耳にしたのは、多分、私が15才の時でした。私が役員になっていた、わずかな人間しかいない部署での修業時代のことで、数人の若い労働者と少女の労働者がいました。そこで彼らが避妊について話していました。若い労働者の一人が、多分17才だったでしょうが、彼がコンドームを持ってきたのです。みんなが、それを見ました。若い女の子たちも若者たちと同じように、とても興味深そうに見ました。両親がどのように避妊しているかなどについては、話した者はいませんでした。しかし、私は両親が洗浄器を使っていたことは知っています。その時は知りませんでした。後に家で洗浄器を見たからです。

中絶について聞いたことはあります。しかし、それほどたびたび聞いたわけではありません。つまり、聞いたことはあるということです。それは、私がアルト・ガンダースハイムで働いていた時に、ある家庭で暮らしていて、そこで私に語られた事なのですが、その家にハノーファーからお客があつて、その家の主婦が私に語った所によると、その客が一度、中絶したことがあるということでした。私がガンダースハイムにいたのは、1922年でした。その時、私は19才でした。その当時は、私は自分に関係ない問題だと思いました。『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’ や『ノイエ・ヴェルト』‘*Neue Welt*’ などの労働者新聞に1週間に一度つく付録に、小説が連載されていました。この小説の中で、この問題が扱われていました。しかし、それは当時の私が考えなければならない問題ではありませんでした。私は、女性が中絶のために刑務所に入れられるということを恐ろしいと思ったものです。

私は、両親の家で、この問題について話したことはありません。ガンダースハイムでは、下宿している家で何でもあけすけに話していましたが、この

家の主婦は若い男の子としての私にまったくオープンに、親戚の女性が中絶をしたことがあるという話をしたのです。しかも、彼女の村でも中絶した女性がいて、それがうまくいかずに、その女性は、病院へ運ばれたそうです。その主婦は「その女性は自分で掻爬しようとして、失敗したので、そこら辺が血だらけで、ひどい様相でした。私たちはその後片付けをして、そして彼女の面倒を見なければならなかったのですよ」と言っていました。

## 10. 職業生活

私は、1917年に国民学校を出た後、上の学校には進みませんでした。私は、8年間の国民学校を、非常に良い成績を修めて終え、修行に入りました。修行中の職業教育によって得た職種は工業セールスマン *Industriekaufmann* です。本当に多くの技術的なことも学びましたが、おもしろかったし、いろいろな意味で私の助けになりました。修行は1920年までの3年間続きました。工業地域用の電力会社で、ブラウンシュヴァイク広域電力会社 *Überlandwerk Braunschweig GmbH* という名前で、本社もブラウンシュヴァイクでした。修行を終えた後、この会社が他の会社と合併するまで、工業セールスマンと会計係として働きました。この会社が、ハノーファー・ブラウンシュヴァイク電力供給会社 *Hannover-Braunschweigische Stromversorgung* に合併されるまで、ブラウンシュヴァイク、ガンダースハイム *Gandersheim* のような農村部、ハルツ地方 *Harz* のランゲルスハイム *Langelsheim* の支所で、後にハノーファーで働きました。20年間通してずっとです。

私は、1938年に亡命したのですが、それまではブラウンシュヴァイク広域電力会社で働いていたのです。当時としては、私にとっても良い稼ぎの仕事でした。失業の心配はありませんでした。当時は、事務職員の失業も多かったのですが、事務職員は失業すると、また仕事を見つけるのが大変むずかしかったものです。私は、一度として失業したことはありませんでした。

1919年から1933年までは、実際、失業問題がない時期はありませんでした。

た。ワイマール共和国時代の1928年は、雇用は比較的良い様に見えましたが、1920年代初頭にはたくさんの失業者がいました。他にも本当にたくさんの過酷なこともありました。この時期には、ほぼすべての修行中の若い徒弟が、修行の後すぐに仕事を失うのではないかと心配しなければならないような年が続いたのです。失業していなくとも、不安がありました。当時は、今と比べるとずっと困った状態でした。

## 11. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

### 〈宗教〉

当時、数ヶ月の間に何千人もの人々が新教の教会から脱退したのです。それは、労働運動や、党組織、日刊新聞によっても、大変強力に担われました。当時、ここブラウンシュヴァイクには『フライハイト』‘*Freiheit*’という、USPD（：独立社民党）の日刊機関誌があつて、その他に『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’がありました。その他に、ブラウンシュヴァイクにはドイツ・フリーメーソン協会の強力な組織がありました。ブラウンシュヴァイクのフリーメーソン協会青少年部は、かなり強力な大勢力で、1万人の協会員を抱えていたのです。

これらの組織が協力したのです。例えば地区教会、というかこの新教の地区教会は、この地域で非常に保守的で、その活動の中でも、とくに農村部での活動において、当時、戦争協力団体や、鉄兜団（：1918年創立のドイツ在郷軍人団）と一緒に活動し、鉄兜団の新旗の清祓をしたりしました。そんなわけで、ここブラウンシュヴァイクでは、労働運動と教会の間では、まったく接点がありませんでした。フランツシェン競技場へのSA（：突撃隊）の行進の際に旗を祝福した時、多くの人が教会から脱退しましたが、それは、ずっとそれより前のことでした。

私は軍隊には行っていません。私は、第一次世界大戦の時はまだ若すぎたし、第二次世界大戦の時は、ドイツ国内にいませんでした。

### 〈政党〉

私が労働組合の組合員になったのは、商業店員中央連盟 *Zentralverband der Handlungsgehilfen*, 後の一般職員中央連盟 *Zentralverband der Angestellten* でした。これは自由労働組合の路線の職員労働組合で、1919 年に加入しました。そして、1923 年から **Juso** の会員になりました。当時、**SAJ**(：社会主義青年労働者)と党の中間にこの **Juso** という組織があったのです。この組織は、一度も隆盛を誇ったことはありませんでした。**SAJ** のメンバーがみな **Juso** に来るということはなかったのですが、はっきりと党執行部から認められた **Juso** という党の組織でした。1925 年末まで会員でした。そして、私は 1923 年に **SPD** の党员になります。私は、それ以前は政治に非常に関心があったのですが、政党の分裂にかなり疑問を感じていたので、政党には入っていませんでした。つまり **SPD** と **USPD** の分裂に疑問を感じていたのです。 **KPD** は、そして **USPD** も、ブラウンシュヴァイクで政治的な役割を演じてはいましたが、**KPD** の党员数は **USPD** より少なかったのです。そして **USP** 派が分裂後に、**KPD** に合流したのですが、**USPD** と **KPD** の関係は良くはなりませんでした。

私は **USPD** にいたことはありません。私の場合、1917 年頃に同じ家に住む、政治的に非常に左翼的な傾向の一家の、同じ年頃の友人によって始まったのです。そしてこの家には、義理の息子がいて、彼を通じてスパルタクス団 *Spartakusbund* と関係がありました。この友人と夏の間、日曜毎に、1917 年と 1918 年でしたが、よくブラウンシュヴァイクの近郊へ泳ぎに行きました。大体は、小さなシュンター川 *Schunter* に行ったのです。この川は、当時、まだ泳ぐのに適していたのです。そこで、天気の良い日曜毎に 70 人、80 人、100 人の若者たちが集まりました。みな当時の青少年労働者でした。しかし、ブラウンシュヴァイクでは青少年労働者と党組織との間に深刻な争いがありました。この青少年たちは、「自由ブラウンシュヴァイク青少年」 '*Freie Braunschweiger Jugend*' と名乗っていました。彼らは、党の青少年会館への出入りを禁じられました。党は戦争中に自力で部屋を借りて、一種の青少年



会館を作っていました。このグループと——はっきりとは区別できないのですが——スパルタクス団との結びつきがあったのです。このグループ自体は、スパルタクス団ではありませんでしたが、二つのグループの間を取り持つ人間がいました。つまり、この集まりは、戦争中の時期は、非常に政治的に意味があったというわけではなくて、泳いだり、遊んだりしていただけなのです。若い娘や女性たちの方が、男性よりもずっと多かったのです。若い男性はみな兵隊にとられていましたからね。ときどき休暇で帰ってきた兵隊の若者がこれに加わって、戦争の酷さを語って聞かせました。ここでは、ロシア革命についても議論されました。ドイツの戦争の即時終結へのあこがれもあったのです。このグループから、後には、1918年後ですが、いろいろな面で同じ人物たちによって担われたのですが、ブラウンシュヴァイクの共産党青年部 *die kommunistische Jugend* が創設されたのです。ええ、ええ、そうですとも、このグループからですとも。私は共産党青年部のメンバーではありませんでした。私は、この友人が共産党青年部のメンバーになっていた間、彼らと共に多くの集会を主催しました。そして1923年にSPDに入党し、1925年末までSPDにとどまりました。たった2年間だけでした。そんなに短かったのは、名前を前にも挙げたましたが、ゲッチンゲンのレオンハルト・ネルソン教授とSPDとの仲違いと関連していたのです。それは、彼の政治理論にそって創設された「国際青少年同盟」“*Internationaler Jugendbund*”(：IJB)のせいでした。IJBは、すでに1917年に創設されていましたが、ワイマール共和国時代に、彼によって政治的にも活性化されたのです。彼は、「国際青少年同盟」のメンバーはみな、何らかの政党に所属するべきだと主張しました。「国際青少年同盟」は、教育組織であるとともに哲学的教養を身につけるための組織であり、個性を養い、政治的教育を受けるための組織だったのです。ネルソンはその上、——彼の倫理的な諸原則のひとつだったのですが、——メンバー各自が自身の認識によって行動することを要求しました。すなわち、この世界の、この点やあの点は変化しなければならないと認識したなら、妥当な政治手段を使って、速やかにその実現のために身を投じるべき

である、という主張です。私はこの IJB のメンバーではありませんでした。しかし私はブラウンシュヴァイクの Juso で、かなり多くの IJB のメンバーと知り合いました。他のいくつかの都市でも労組活動を通じて、非常に魅力のある人々と知り合ったのですが、後になってその人々が IJB のメンバーだったということを知りました。例えば、マクデブルク *Magdeburg* やハノーファー、そしてブラウンシュヴァイクの Juso で知り合ったのです。だから、この Juso での活動には、大変、満足しましたし、刺激も受けたのです。討論の仕方や政治的な問題の扱いに細心の注意を払って事に取りかかるとか、お互いに噛み合った議論をする等のスタイルは、IJB のものでした。それは、IJB の 4 名のメンバーのスタイルでしたが、Juso のグループに非常に強い影響を与えたのです。つまり、ブラウンシュヴァイクには IJB のグループがあつて、このグループは 4 名のメンバーから成っていました。そして彼らはみな Juso のメンバーでした。彼らは、かなり影響力をもっていました。それゆえに衝突がありました。USPD と SPD の再統一後、そして特に 1923 年までの共産党の政治実践を経験した後、——中部ドイツの蜂起、ハンブルクの蜂起、そしてソ連における進展がありました——国際青少年同盟は KPD との共同活動を排除するということまでいきました。何らかの政党で活動するというのが義務だったので、一緒に活動するにふさわしい政党として SPD だけが残ったのです。そして IJB のメンバーすべてが社会民主党の党員となり、彼らの暮らす町々で、ブラウンシュヴァイクでのように活動したのです。これが衝突の原因となりました。まずレオンハルト・ネルソンが形式的民主主義体制というものを非常に批判的に判断したからです。そこで形式的な衝突がありました。そうすると、ネルソンが党幹部との会談に招待されました。この会談は、彼にとっては屈辱的に経過しました。それに非常に感情的に進められたので、彼はこの会談の場を去りました。そうしたら、社会民主党が IJB のメンバーは社会民主党に所属することはできない、という決議をしたのです。これによって、すべての IJB のメンバーは、IJB を去るか、あるいは SPD を去るかを迫られたのです。多くのメンバーが、多分ほと

んどのメンバーが、SPD を去り、そして彼らと付き合っていた、SAJ や Juso の多くの若者が、それに抗議し、SPD を去っていきました。当時の私もそうでした。

私はその後、つまり 1926 年に IJB によって創設された政治組織である ISK ( : *Internationaler Sozialistische Kampfbund*) 国際社会主義闘争同盟のメンバーになりました。定款や目標設定によると、メンバーに対し非常に高度の要求を課す政党でした。活動家のみを必要とし、紙上の兵隊ではなく、一緒に活動するメンバーのみを認めるというような政党でした。そして、6 年間の活動中、とくに 1929 年からは、迫り来るナチズムと闘い、この危機に対し、労働者を組織することに骨を折りました。この組織は 1933 年に禁止されましたが、非合法でさらに存続しました。しかし、1937 年から 1938 にかけて、ゲシュタポ *Gestapo* ( : ナチスの秘密国家警察) によって主要メンバーが捕まってしまったのです。ゲシュタポが全員を捕まえたわけではないのですが、組織は逮捕や亡命によって多大な損失を与えられました。それで、それからは結びつきを保持したり、つまり非常に弱くなったネットの中で結びつきを保持したり、情報をさらに回したり、部分的には外国からの情報を受けたり、あるいは外国への接触を保ったりするということくらいのことしかできませんでした。

私は 1945 年に再びドイツに戻ってきました。最初は、短い間で、半年間でしたが、ハノーファーにいました。そして、その後にブラウンシュヴァイクに帰って来たのです。

私の家では、新聞は『フォルクスフロイント』を読んでいた。『フォルクスフロイント』が右派社会主義に、つまり多数派社会主義になった時は、『フライハイ特』『*Freiheit*』を読みました。それと父は、ある時期には『フォアヴェルツ』『*Vorwärts*』も定期購読していました。これは、1918 年から 19 年にかけてでした。日刊紙『フォアヴェルツ』は中央の機関紙でした。私が労働組合に入り、姉妹や弟も労働組合に入ってから、複数の労働組合のいろいろな新聞が家に配られました。その他に『ヴァーレ・ヤーコプ』『*wahre Jakob*』

も定期購読しました。これは風刺的な論調の週刊誌でした。一時期、『コスモス』‘*Kosmos*’を定期購読していました。というのも、これは労働運動をしている人々の間で文化雑誌として好まれていたからです。自然愛好家などにです。その後、『ウラニア』‘*Urania*’, これは労働運動から出発して、まあ別の社会政治的な基盤で構想されたものでした。この『ウラニア』は、イエーナ派の影響を受けていたのです。これと一緒に『フォルクスフロイント』を読んでいた。その後、私が意識的に政治的に活動するようになった時には、数年間にわたり『ドイツ経済学者』‘*der Deutsche Volkswirt*’を読みました。20年代でした。多分25年から26年にかけてだったと思います。私が知っているかぎり、グスタフ・シュトルパー *Gustav Stolper* が『ドイツ経済学者』を創刊して、1933年まで編集していました。あるいは1933年以降もかもしれません。彼は、後に亡命しました。その他には、『フラウエンヴァルテ』‘*Frauenwarte*’という婦人新聞が家に配られてきていました。

私の両親の家で皆が尊敬していた人物という、まずアウグスト・ベーベル *August Bebel* です。ブラウンシュヴァイクの政治家では、はっきりとハインリッヒ・ヤスパー *Heinrich Jasper* を尊敬していました。アウグスト・メルゲス *August Merges* のことも尊敬していました。政治的には彼とは一致しなかったけれど、父も彼を尊敬していました。政治的に一致していなくとも、彼が気骨のある人物であることを高く評価していたのです。メルガー通り *Mergerstraße* は、彼の名前に由来します。メルガー通りは、小さな通りです。

メルガー通りと名前が変えられたのは、戦後すぐでした。この時、たくさんの通りの名前が変えられたのです。当時、私はまだ市長ではありませんでした。だから、なぜ彼の名前があんな小さな通りに付けられたのかは、私はわかりません。

グローテヴォール通り *Grotewohlstraße* はありません。彼もヤスパーやシュタインブレツヒャー *Steinbrecher* のように、この大臣でした。しかし、ヤスパーとシュタインブレツヒャーは、二人共に命を失っています。それに、グローテヴォールは1945年から46年にかけて非常におかしい役割を演じま

した。だから、オットー・グローテヴォールは、ここブラウンシュヴァイクではもう尊敬されないのです。オットー・グローテヴォールは、一時、かなりの名声を誇っていました。彼は賢く、また有能な男でした。つまり、彼の能力は高く評価されていました。ではあるけれど、彼については、党の中で異論がなかったわけではないのです。彼は、まあ、すれっからしの党の策略家であり、また煽動的でもあったのです。もし彼が1945年にちがった決断をしていたなら、ここで再び社会民主党の名簿に入っていたなら、ちがっていたでしょう。そうしたら、オットー・グローテヴォールは党指導部に属しただろうと私は確信しています。彼は党の連邦指導部に属したことでしょうとも。両親にとって、ベーベルとヤスパーは、本当に崇拝した、偶像的存在でした。メルゲスの場合は、ちょっとちがいます。メルゲスのことは、正直な人物として尊敬されたのです。私の父は、アウグスト・メルゲスが1918年以降に進めた政治を、はっきりと拒否していました。私が、15才の時のことですが、ブラウンシュヴァイクではベルリンよりも2日間早く起こった革命と、メルカー軍 *Maerker-Truppen* による占領の間の危機的な時期、政治的に非常に流動的な時期でしたが、この間に異常に多くの政治集会があり、そこでいつもアウグスト・メルゲスとゼップ・エルター *Sepp Oerter* が演説をしました。そこで私は15才の若者として、この二人を非常に崇拝しました。個人的に話したこともあり、そして非常に崇拝したのです。まだ30年代までメルゲスとは時々、接触があったし、メルゲスに対するこの個人的な崇拝の気持ちは、つまり人間的な尊敬の念は残っていました。しかし、エルターの場合は、人間的な軽蔑の念によって、尊敬の気持ちは失せてしまいました。1925年には、彼は **NSDAP** と少なくとも接触していました。メルゲスは **KZ** (強制収容所) ではなく、監獄に入れられて、危篤の状態で監獄から釈放され、その後、間もなく亡くなりました。メルゲスは、1919年には **KPD** に属していました。そして、ブラウンシュヴァイクの占領後も、つまり地下に潜った後もです。当時、彼が生き延びることができたであろうかどうかは、私は知りません。というのもメルゲスはブラウンシュヴァイクのブルジョワの大部分から憎ま

れていたのですから。彼は、1919年にロシアに行きました。そしてロシアから戻ってきたのです。ロシアでの進展に対して非常に批判的でした。そして彼は、共産労働者党 *Kommunistische Arbeiterpartei* の共同創設者になったのです。それは小さな分裂運動ではありませんでした。政治的にいきづまっていたのです。まあ、それで彼はその後、かなり引きこもって生きました。そしてサンジカリズムやアナルコ・サンジカリズムの小さなグループと一緒に活動しました。しかし、1933年に再び非合法活動をしているグループに接触したのです。

### 〈労働組合〉

私が労働組合の組合員になったのは、商業店員中央連盟 *Zentralverband der Handlungsgehilfen*、後の一般職員中央同盟でした。自由労働組合の路線の職員労働組合で、1919年に加入しました。

そして、1923年から1926年までは、一般職員中央同盟 *Zentralverband der Angestellten* の青年部長でした。1930年から1933年までだったと思いますが、同じ産別労働組合の工業部門技能工グループ長 *Fachgruppenleiter* でした。他の組織では、役職についてはいませんでした。私は、経営協議会 *Betriebsrat* の役員でした。経営協議会には下部組織である労働者委員会 *Arbeiterrat* と一般職員委員会 *Angestelltenrat* があって、私は私の会社の一般職員委員会に属していました。これも1930年の初頭でした。そして1932年か1933年に再び立候補して、また選ばれました。しかしそれからナチスによって罷免されたのです。

その時の会社は、ハノーファー・ブラウンシュヴァイク電力会社 *Hannover-Braunschweigische Stromversorgungs-AG* でした。本社はハノーファーでしたが、私はブラウンシュヴァイクの支店で働いていました。経営協議会の役員は、1930年初頭からでした。30年からだったか、31年からだったかは、今はもうはっきりとは覚えていませんが、いずれにしろ政治的に非常に危機的な状況の時期でした。33年まででしたが、その後、排除されたの

です。

私が労働組合に入ったのは、家族の伝統に非常に強い影響を受けていたからです。私の父は、1891年にブラウンシュヴァイクでドイツ金属労働者同盟を他の仲間と一緒に創設しました。それ以降、間断なく無給の役員や会館会計係として労組の仕事をし、私は9歳の時にはすでに実際の労組活動に組み入れられていました。父はドイツ金属労働者同盟の週刊機関誌である『ドイツ金属労働者新聞』 *deutsche Metallarbeiter-Zeitung* が、父が受け持っていた地区の労組員の家に、土曜日毎に届いていることが大事だと思っていました。つまり、彼が仕事を終えて、午後あるいは夕方、家に帰ってきた時にはすでに、家に金属労働者新聞が届いているようにということです。そこで、姉と私が、土曜日毎に学校が終わると、約150部の新聞を配達しました。

こういうこともあって、父親の影響が強かったのです。こんな事もありました。それは、私が見習い修行に入った時のことですが、職業学校の、当時は商業青年職業学校 *Kaufmännische Fortbildungsschule* といいましたが、ここでの同僚が、DHVに加入するようにと誘い始めたのです。DHVは当時、一般職員の中では一番強力な組織でした。ドイツ国家商業店員同盟 *Deutschnationaler Handlungsgehilfenverband* という名称で、反ユダヤ主義で、女性を加入させませんでした。父は、「加入を迫られてもDHVには絶対に入るな」と私に言いました。

当時、商業店員中央連盟は、非常に弱体で、会社でも加入者は少なかったのです。だから、私にパイオニアとして登場するようにと強くは迫ってはいきませんでした。私はそれにまだとても若かったのです。私が修行に入ったのは13歳半でしたから。それからまもなく革命の1918年になり、その直後に商業店員中央連盟——当時はまだそういう名称だったのです——に入りました。

1923年に党に入ったのですが、これも父の影響です。父は、古くからの労働組合員というだけでなく、社会主義者鎮圧法の事件以来、社会民主党に所属していました。1890年からです。私の父は小市民の出です。田舎の小市民

の出で、本当は親が牧師にしたかったのです。しかし、彼は牧師にはなりたくなくて、機械組立工になったのです。牧師と機械組立工では大きな違いがありますが、機械組立工になったことが、その後の生き方を決めたのです。見習い修行の後、さらに旅職人の遍歴に出ました。ドイツ国内の土地のかなり多くの部分を歩いて回ったのです。そして、しばらくマインツに落ち着き、靴職人の親方の所に住みました。その親方は、小さな工房をもつ職人で、当時まだ禁止されていた社会民主党の支持者でした。この親方が父にこの政党に加わることを納得させたのです。それ以来、父は、本当に心から筋金入りの社会民主主義者だったのです。それに、非常に強く倫理的な行動をとったというか、彼の判断によると、この運動に内在する非常に倫理的な価値観によって行動したのです。つまり、彼自身にとっても一度として明らかにではありませんでしたが、マルクス主義的にではなく、倫理的に動機づけられた行動だったのです。

#### 〈帰属意識〉

私は、自分があきらかに労働者階級に属していると思っています。労働者の家庭環境であつたし、居住地域も労働者の環境でした。しかし、職業生活においては、異なっていました。というのも、仕事場では、私は小市民との接触がありました。中流層とは言いませんが、小サラリーマンとの接触です。まったく異なった環境でした。しかし、私はその環境ではある種の異物でした。私はその環境に芯からは適応しませんでした。同僚たちは **DHV** 指向で、多くが **DHV** に所属していました。

私たちは労働者の子供で、労働者の子供として扱われました。他の階層の子供たちとの接触がなかったので、比較することもできませんでした。例えば、堅信礼の授業で、ちなみに私は堅信礼を受けているのですが、他の階層のグループの子供たちもいましたが、彼らとは接触がなかったのです。この境界は、なくなりませんでした。はっきりと保持され続けたのです。他のグループの子供たちが私たちの持てないような自転車に乗っているからといっ



て、私は自分たちが貧しいとかと感じたことはありませんでした。私たちよりも裕福そうな人々を見ましたが、例えばブラウンシュヴァイクにいる親戚の人々とかです。小手工業者の所帯です。子供の頃いつも、この家を訪ねると、素敵な暮らしに感嘆したものです。贅沢な所帯というわけではなかったにもかかわらず、労働者の家に比べると素晴らしかったのです。子供の頃に、いつも言っていたものです。「ああ、なんて素敵なんだろう」ってね。しかし、そんなに深く私の中まで浸透していたというわけでもありません。私は羨ましいと思いませんでしたし、憤りも感じませんでした。

## 12. 祝い事・余暇

### 〈祝い事〉

第一次世界大戦前の時期でしたが、5月1日のメーデーには、党や労働組合の祭りがあって、皆が大きなホールで一同に会しました。労働者体操協会は、冬の祭りを催しました。そういったことは、日常生活にちょっとした盛り上がりを見せました。祭りの中でも、一番に盛り上がったのは、メーデーでした。メーデーには家族も参加しました。メーデーは党の祭りでもありました。ブラウンシュヴァイクでは、党の祭りがありました。祭りの時は、大きなホールが貸し切りになって、楽団もいます。帝国議会議員が演説し、彼自身が来られない時には、その夫人の演説があります。それに子供たちを喜ばせる物もありました。どの子も飴や何か小さな玩具の入った袋をもらいますが、それが子供たちにとっては忘れられない大きな体験となりました。

誕生日は、私の家では両親が忘れずに祝ってくれました。何か特別な食事などがありました。しかし、大きな誕生祝いなどはしませんでした。

クリスマスには、もちろん大きな意味がありました。クリスマスの祝いは、いつも両親が、とても楽しく催してくれたものです。そのために必要なお金は、消費組合の利益配当金があったからこそ、工面できたのです。つまり、商品の売上に応じて、払戻金があって、それがクリスマスに出たのです。ク

クリスマスの祝いは、私の家ではいつも、とても素敵でした。それは、私たちの住んでいた共同住宅の中の他の家庭でも同じように祝っていました。子供の頃にもっとも印象深かった祝い事は、クリスマスでした。

そして、青少年の頃は、休暇中の夏至と冬至の祭りがありました。燃える火の付いた棒をかざしたものです。それは、もちろん刺激的でした。ロマンチックでしたし。この冬至と夏至の祭りは、弟姉妹たちにも大きな意味を持っていました。

私は 1917 年に堅信礼を受けました。私の弟姉妹の内 3 人が堅信礼を受け、2 人は青年式に出ています。上から 3 人は堅信礼を受け、下の 2 人は青年式に出たということです。

復活祭は、もちろん、家で復活祭の卵の色付けや卵探しをしました。昇天の祝日は、父と一緒に遠足をしました。母は、残念なことに遠足に行く暇があまりありませんでした。

大晦日は、皆がいっしょに遅くまで起きていました。そして何か暖かい飲み物が作られて、普通はクリスマスツリーが、もう一度、灯されました。

私の家では、クリスマスと労働組合と党の催しが、もっとも重要な祝い事でした。

カーニバルには仮面舞踏会がありましたが、私の家では全然、祝いませんでした。両親は、カーニバルの仮面舞踏会に関心がなかったのです。それに私たちは、自分で行くほどに大きくなってはいませんでした。

昇天の祝日に父と一緒に遠足に出かけましたが、ほかには日帰りの遠足などはしませんでした。私が 14 歳になってからは、学校の同級生や同じ年頃の友人たちと一緒に遠足に出かけました。しかし、これも 1918 年以降のことです。エルム *Elm* だとか、ブラウンシュヴァイク近郊にある、あちこちの森へ行きました。オーカー川だとか、南の方のハイデの野原、ヴィンケル *Winkel* の辺りへ行ったり、時にはハルツ地方へも行きました。しかしハルツへ行ったのは、かなり後になってからです。私は 1923 年に一般職員中央連盟青年部の議長になりましたが、私は 1921 年から青年部で積極的に活動していまし

た。この青年部のメンバーは、日曜日ごとにどこかへ行っていたものです。

### 〈余暇〉

私は、修業時代は、食料品を手に入れることに余暇を使っていました。土曜日と日曜日は村々に行って、買い出しをしました。家庭菜園として賃貸されている休閑地や、あるいは自分の家庭菜園でジャガイモを植えたり、収穫したり、その他のことをしました。あるいは、森に行って、これは日曜日の特別な楽しみでしたが、ブラックベリーを集めました。あるいは、最後の戦争の年の1918年の秋に、——革命と時期が重なるのですが——私たちは森に行って、ぶなの実を集めました。この年は、ぶなの実の豊作の年で、これは100年に一度のことだったのです。私たちはとてもたくさんのぶなの実を集めたので、オイル圧搾所でぶなの実からオイルを作ってもらいました。これで、またやっと油分を得ることができたのです。それが余暇の過ごし方でした。

あるグループと知り合ったのは、ある夏の日曜日のことでした。午後の数時間、出かけたものです。つまり、私は夏にある粗末なプールに行きました。もちろん泳ぎに行ったのです。私の労働時間は、見習いとしては、かなり良い方で、長かったのです。週の実働45時間でした。その労働時間の他に、さらに5回、2時間の休み時間を取らなければなりませんでした。それに少なくとも4日は、夕方に職業学校に通ったり、あるいは少し外国の言語を学ぶために、自由選択の科目を受けました。だから、それ程たくさんの余暇は残りませんでした。職業上の負担の他に語学を学ぶなどということも余暇の過ごし方とは言えます。それまでにやれなかった事を、もう少し、やりたいという欲求があったのです。

父は仕事に就いていた間は、金属労働者同盟のために組合費を集めていました。彼は幹部でしたから。党のためにも働いたし、靴底を張ったり、庭や畠の手入れをしたり、その他何でも、家族のために働きました。そして時々友人の所に行って、少し話し、ビールを1杯飲んだり、党の集会に行ったり

したのです。しかし、余暇がそんなに多くあったわけではありません。

父が外でビールを飲みながら会っていたのは、職場の同僚や、労働組合や党の仲間でした。職場の同僚ではない、労働組合や党の仲間とも会っていました。例えば、父が組合費の集金の際に訪ねる仲間たちです。ある仲間は、他の職場で働いていました。いつも一緒に会っていたのは2人でした。一人とは、土曜日の終業後に会っていました。もう一人とは、日曜日に会っていました。仕事後の一杯の際に、大体は当面の政治的な問題について集中的に話していました。父は、話した事をしばしば「今日は、あの事について話してきたよ」と家で語っていました。父が同僚たちとビールを飲んできたのは、なんらかの形で仕事と結びついたところでした。ブラウンシュヴァイクにはある時期、いわゆる労働組合ハウスと呼ばれた飲み屋がありました。ヴェルダーにも小さな飲み屋がありました。その飲み屋に行くと、10 ペニヒで1杯のビールを飲んだのです。その飲み屋の入っている家も飲み屋も労働組合の物ではありませんでした。労働組合ハウスと呼ばれていたのは、いくつかの労働組合の事務所がその家の中に入っていたからなのです。その家が労働組合のものだったのかどうかについては、私は知りません。しかし、いずれにしても労働組合ハウスと呼ばれる家でした。私が知ってる限り、その家は個人の所有で、部屋貸しをしていたのです。そして、その飲み屋はもちろん、飲み屋のおやじが経営していたのです。個人による経営でした。その他にも2〜3のレストランがありましたが、その内のひとつはまだ今も残っています。『ムッター・ハーベニツヒト』‘*Mutter Habenicht*’です。このレストランも大変人気がありました。場所は、パーペンシュティーク *Papenstieg* で、「フィーヴェーク・ハウス」*Vieweg-Haus* の横の狭い通りです。つまり、旧市街にありました。私が知っている限り、今も『ムッター・ハーベニツヒト』という名前で、その間にブラウンシュヴァイクの伝統的な飲み屋となりました。父は、この飲み屋が好きで、ここで友人や知人と会うために、よく行ったものです。しかし、ここが典型的な労働者の飲み屋であったのかどうかは、私はわかりません。労働者たちが「ああ、俺たちはムッター・ハーベニツヒ

トに通っていたのさ」と言っていましたから、贅沢な飲み屋でなかったということは確かです。その他にも次のようなのもありました。つまり、懲戒免職でクビにされた労働者が、小さな飲み屋を開いたものです。そんな労働者の飲み屋がたくさんあって、ブラウンシュヴァイクには少なくとも4～5軒の、その様な、労働運動の中でにらまれた、労働者が経営する飲み屋があったのです。ひとつはウィルヘルム通り *Wilhelmsstraße* にありました。そこには私も父に連れられて行ったことがあります。何という名前だったかは忘れてしまいました。市の西のヴェステン地区にも1軒ありましたが、これはもう今はありませんし、何という名前だったかも覚えていません。私が知っているのは、そういった労働者の飲み屋がたくさんあったということです。

母がどのように余暇を過ごしていたのか考えてみると、ブラウンシュヴァイクには、母の親戚がいまませんでしたし、ブラウンシュヴァイクにいる父の親戚ともわずかな付き合いしかありませんでした。しかし、後に一番上の姉が成長し、母のことをいくらか考えてやれるようになってから、数家族と行き来をするようになりました。その家を訪ねたり、一緒に休暇を過ごしたりしたものです。しかし、母は暇な時間はとても少なかったもので、ひんぱんな付き合いであったとは言えません。

しかし、母は、自由フォルクスビューネ *Freie Volksbühne* ができてからは、折を見ては、私たちと芝居を見に行きました。これは、とてもよいことでした。そうでもなければ、母は人生すべてを家族と庭仕事のためだけに捧げ尽くすことになっていたでしょう。母は精神的には、いろいろなことに興味をもっていました。本を読んだり、質の良い新聞小説を読みました。

私は、ほとんど飲み屋に出入りしませんでした。私は青少年グループ活動に早くから入っていましたから、アルコールや強い酒の類には、ほとんどなじまなかったのです。だから、ほとんど飲み屋には行きませんでした。それは、重要ではなかったのです。私は、短い期間でしたが、職場の同僚とあるクーゲル・クラブ（：ボーリング・クラブ）に通っていました。この時期には、いろいろな飲み屋に出入りしました。ボーリングのレーンは、飲み屋の

1 室にあったからです。

私はドイツ・フリーメーソン協会に属していましたが、この組織はブラウンシュヴァイクでは非常に会員が多く、少なくとも 1 万人の会員がいました。当時は本当に隆盛を誇っていたのです。私は多分、1924 年に入会したのだと思います。1933 年まで会員でした。労働者禁酒同盟 *Arbeiter-Abstinentenbund* には 1926 年に入会しました。文化組織では自由フォルクスビューネに属していましたが、フォルクスビューネには 1925 年に入りました。

どちらも 1933 年までです。労働者禁酒同盟は、アルコール中毒の労働者組織でした。もちろんすべての組織で、会員にはみなアルコール禁止が義務づけられました。大きな意味を持つ組織ではありませんでした。ちょうど IJB のメンバーもみな禁酒生活をしていたので、私もこの組織に入ったのです。つまり、彼らはベーベル *Bebel* の「酒飲みの労働者は思考しないし、思考する労働者は酒を飲まない」という言葉に結びつけたのです。アルコールはまた労働運動の中で多くの災いを引き起こしたので、正当性がありました。そういうわけで、私は労働者禁酒同盟に入ったのです。しかし私はこの組織のために非常に多くの仕事をしたわけでもないし、この組織を基盤に多くの活動がなされたわけでもありません。労働者禁酒同盟は、ここではそれほど浸透していませんでした。すべての地区グループについて判断することはできませんが、私の総合的な判断では、労働者禁酒同盟は他の地域でも小さな組織だったし、それなりの影響しか出せませんでした。だから、この労働者禁酒同盟は、この領域で国際禁酒協会 *Guttempler-Orden* が成就できたほどには、目標を達成しませんでした。

私は、ドイツ・ユースホステル協会 *Deutscher Jugendherbergsvorband* の会員でもありました。少なくとも 1920 年から、亡命する前のドイツにいる間は、ずっとこの協会の会員でした。1938 年までだったと思います。

それから、映画館では上映されない映画を見せる映画クラブもありました。つまり、あのロシアの映画なんかですよ。しかし、何という名前だったのか、

もう覚えていません。これにも数年間は加入していました。このクラブも労働者組織のものでしたが、かなり強く左翼の影響を受けていました。とくに共産党の影響です。共産党の組織ではなかったけれども、強い影響を受けていたのです。このクラブは、1920年代末期にできました。

それから読書サークルがありました。これは最初の社会民主主義の読書共同体でした。私たちは、一時期、このサークルに所属していました。それに、ブラウンシュヴァイクには、すでにかなり早い時期から充実した国民読書室や公共図書館がありました。私たちはそれらからも多くの本を借り出しました。文芸書等々もです。この読書室は、最初はある協会が運営していました。この協会は特に労働運動と直接に関係があったわけではありませんでした。この協会は、ある公益財団と関係があったのです。つまり、ブラウンシュヴァイクには、工業企業家のマックス・ユーデル *Max Jüdel* がいました。彼はブラウンシュヴァイクに非常に大きな工場を造ったのです。しかし、独身のままで亡くなりました。そこで、彼はその全財産を公益目的のために寄贈したのです。彼は、例えば、ブラウンシュヴァイクに火葬場を建設させました。彼は、ユーデル財団を設立し、数百万の財産をつぎこみました。住宅建設協同組合の運営を援助しました。

私が知っている限り、あの公共図書館や国民読書室の設立までにも甚大な力を貸したのです。この協会は、私が12才の頃のことですが、まったく安い価格で芝居も見せました。今の州立劇場で上演されました。ここから、後に、ベルリンの劇団をモデルにした『自由フォルクスビューネ』も生まれたのです。そういう風にして、私の家に本当にたくさんの文学書が入ってきたというわけです。しかし、私は、このことを典型的な例であるとは思っていません。つまり、私の場合は、例えば、長姉がずいぶんたくさんの本を読んでいたのです。長編小説とか、当時、手に入る本はすべて、テオドール・シュトルム *Theodor Storm* だとか、極地探検家物語全集も読みました。つまり、ナンゼン *Nansen* やアムンゼン *Amundsen* などでした。